

特別支援学校教員における医療的ケアを必要とする児童生徒の 健康管理に関する力量の向上についての調査研究

高橋 陽子

I 問題

周産期医療や在宅医療の普及・児童生徒の障害の重度・重複化を背景として、特別支援学校の通学生の中にも生命の維持、学習機会の保障のため「医療的ケア」を常時必要とする児童生徒が多数在籍している（下山，2007；他）。

2004年の行政措置を経て、特別支援学校で医療的ケアにあたる教員に研修の義務が課され、「看護師の具体的指示の下、看護師と教員が連携・協力して実施を進めること」（厚生労働省，2004）が規定された。つまり、看護師は医療的ケアを「連携・協力して実施を進める」同僚になった。

山崎・小森・紅林・河村（1991）は、教員の専門的力量がこの同僚との関係の中で形成される側面があることを報告している。そして、この山崎ら（1991）を参考にした渡辺（2007）は、「教師は日々のインフォーマルな学びを最大の糧としている」とし、このインフォーマルな学びの意義が主張されている。このような知見から、教員が実践を振り返ることによって「気づき」が生まれ、その「気づき」が教員の力量向上に結びついていくと捉え（高橋・2000）、多職種からなるチームにおいても「インフォーマルな学びが成立し、児童生徒の健康管理に関する力量を向上させている可能性を考えた。

II 目的

以下の点から特別支援学校において医療的ケアを必要とする児童生徒の健康管理に関する教員の力量を向上させる要因を明らかにする。

- 1 医療的ケアを必要とする児童生徒の担当教員の「気づき」「学び」の実態。
- 2 「気づき」「学び」の促進要因。

III 方法

1 研究1—A 県立 B 養護学校におけるフィールドワーク

- 1) 調査対象：A 県立 B 養護学校で、医療的ケアを必要とする児童生徒が在籍する 2 学級を担当する教員計 8 名と同校の常勤看護師 1 名。
- 2) 調査方法：参与観察。対象校の医療的ケアを必要とする児童生徒の在籍学級において、児童生徒の登校から下校までの間を対象に医療的ケア実施前後と実施中の会話、会話に続く言動を筆記記録に採って収集した。
- 3) 調査内容：教員と看護師との協働における「気づき」の実態。

2 研究2—質問紙調査の実施

- 1) 予備調査
 - ①目的：医療的ケアを必要とする児童生徒の担当教員の職務環境、医療的ケアや看護師との協働に対する教員の意識と現状、教員に起こる「気づき」「学び」の内容を調査し、質問紙調査暫定項目の加除修正のためデータを得ること。
 - ②対象：医療的ケアを要する児童生徒の担当をした経験若しくは関わった経験のある、平成 18 年度本大学大学院本専攻現職派遣大学院生 3 名。
 - ③方法：1 名につき約 1 時間のインタビュー。
 - ④結果：質問項目の概要は、次の通りである。
 - 1 回答者の属性、2 回答者の職務環境、3 看護師との協働に対する意識、4 「気づき」「学び」の実態、5 医療的ケアの意義、6 健康管理に関する力量の捉え、7 医療的ケア実施に関する現状認知と課題意識（計 29 問）。

2) 本調査

- ①目的：医療的ケアを必要とする児童生徒を担当している教員と看護師の「気づき」「学び」の

事例を収集して仮説を生成し、研究1のエピソードとあわせて考察に用いる。

- ②対象：医療的ケアに関する研究発表をしたことのある全国の特別支援学校中 32 校で、医療的ケアを必要とする児童生徒の担当をしている教員と学校看護師各1名。
- ③方法：郵送による質問紙調査。
- ④調査内容：医療的ケアを必要とする児童生徒の担当教員の職務環境、医療的ケアや看護師との協働に対する意識と現状、教員に起こる「気づき」「学び」の内容。

IV 結果

1. 研究1：参与観察を通して、教員に健康管理に関する学びが起こっていると思われた場面について、一連のやりとりをエピソードとして切り出した。得られた20個のエピソードの中から象徴的な場面7つを取り上げ、それぞれのエピソードにタイトルを付けた(表1)。

表1 エピソードのラベリングとカテゴリー化の結果

エピソードのタイトル	カテゴリー
教員の健康観察の視点の例	健康観察の視点
看護師との会話の中で新しい知識を得ている例	医学的な知識
看護師・教員間で情報の共有がなされている例	情報の共有
情報の共有がコミュニケーションに結びついた例	コミュニケーション
コミュニケーション上の努力の例	情報の共有
会話の中で情報交換がなされている例	日常の情報交換
看護師の教育を意識した言動の例	看護師の教育への意識

これらをカテゴリー化し、各カテゴリーについて教員の「学び」「気づき」の背景と、両者の関わりを視点として各カテゴリー間の関係について、仮説を立てた(図1)。「コミュニケーション」と「情報の共有」は相互に支え合い、「コミュニケーション」を通して「健康観察の視点」「医学的な知識」が学びの内容として存在している。その背景要因には、「情報の共有」が「日頃の情報交換」と

「コミュニケーション上の努力」とその努力の成果を生み出している状況があると仮定した。

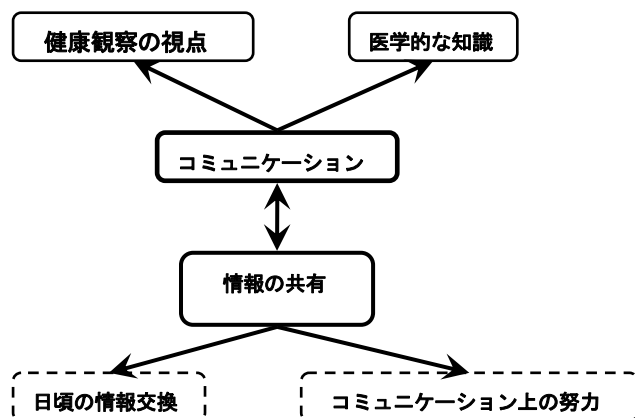


図1 教員の「気づき」「学び」とその要因の相関仮説

その結果、協働を通して教員が学んでいる内容には、「健康観察のためのより細やかな視点」、医療的ケアの手技を含む「医学的な知識」があることが明らかになった。また、教員との協働を通じた看護師の学びとして、教育への意識が高まり教育を意識した言動をするようになる例が確認された。

2. 研究2：質問紙調査では、両者の専門性の違いを考慮して、教員対象の質問紙と看護師対象の質問紙を別に作成し、依頼文書と共に郵送した。養護学校・特別支援学校計46校中32校(教員32名・看護師31名)から回答が得られた。回収率は68.5%(教員69.6%・看護師67.4%)であった。

その結果、教員・看護師の両者が協働の中で力量の向上につながる「気づき」「学び」が得られた要因として、互いを身近に感じ何でも話し合えるような「教員と看護師が良好な人間関係」が形成されていること、一緒に活動する場が豊富な職務環境(共有できるインフォーマルな場の多さ)、看護師の児童生徒への接し方が共感できるものであり、「児童生徒と看護師が望ましい関係を築いていること」が抽出された。

V 考察

1. 医療的ケアを必要とする児童生徒を担当する教員の「気づき」「学び」の内容

医療的ケアを必要とする児童生徒を担当する教員の「気づき」「学び」の内容として、「健康観察のためのより細やかな視点」、「医療的ケア

の手技を含む医学的な知識」があることが明らかになった。これらが教員の健康観察の視点の明確化と的確さの向上に結びつき、教員の健康管理の力量の向上に影響していることが示唆された。

また、教員との協働を通して看護師は、児童生徒は患者ではなく、学校へ学習に来ていることを意識するようになったという例が多く寄せられ、教員の言動や姿から、個々に応じた対応の仕方を学んでいる事実が確認された(※)。

2. 医療的ケアを必要とする児童生徒の担当教員の「気づき」「学び」の促進要因

本研究の結果から、教員・看護師の両者による協働の中での「気づき」「学び」は、「活動の場の共有」、「他職種とのコミュニケーション上の努力」によって促進されることが示唆された。具体的には、教員と看護師と一緒に活動する場が豊富な職務環境（直接指導・談話の機会）であること、看護師と教員が何でも話し合える良好な人間関係を築いていることが、質問紙調査の結果から明らかになった。

また、先述の看護師の「学び」(※)と関連して、看護師も必要に応じて児童生徒に対して個々の目標に沿って教育を意識した態度で関わるのが、教員とのコミュニケーションの促進要因の一つとなっていることが示唆された。

VI 今後の課題

1. 多職種間の協働の困難さの分析と解決方法の検討の欠如

本論では、研究テーマの検討段階から常に、協働のメリットにのみ焦点を当てた。今後は「気づき」「学び」の促進要因の他、多職種間による協働の阻害要因を抽出し、現場での課題解決、役割分担等実施体制の構築等に有効な、具体的手だての検討のために参考となる研究が望まれる。

2. 本研究の情報収集過程に見られた看護師支援の必要性

本研究2の質問項目「学校看護師として日々感じていること」で得られた回答から、看護師支援の必要性を述べる。第一に、“一人職場”の場合、「看護師としての技術やみとりを日常的に評価し

てくれる立場の人間の不在」といった回答に見られるような、医療職者としての不安感の軽減、専門性の維持・向上のための支援である。医療サイドと関わりを持ちやすい職務環境で、医療職者としての専門性の維持・向上のための支援が求められていることがわかった。

第二に、職業的な身分保障である。複数の非常勤看護師が勤務している場合、「継続的な健康観察ができてにくい」点、「パートという勤務形態では、給与の面から勤務自体の継続が困難」である点、身分の曖昧さに対する回答が見られたことから、学校看護師としての職業的な身分保障が求められると考える。

文献

厚生労働省(2004) 盲・聾・養護学校におけるたんの吸引等の取り扱いについて。

<http://homepage3.nifty.com/kawatani/shougai/034.htm>

下山直人(2007) 医療的ケアを必要とする幼児児童生徒と看護師の配置状況について。肢体不自由教育, 180, 55-56.

高橋誠衛(2000) 重度重複障害児の実態把握過程における教師の気づき。上越教育大学平成12年度修士論文。

渡辺政治(2007) 教師の成長に関する特別支援学校教師の意識調査—効果的な研修の構築のために—。つくば自立活動研究会「研修」研究グループ平成19年自立活動研究セミナー発表資料, 1-4.

山崎準二・小森麻知子・紅林伸幸・河村利和(1990) 教師の力量形成に関する研究—静岡大学教育学部の8つの卒業コーホートを同一対象とした1984年追跡調査の結果の比較分析—。静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編), 41, 223-252.